

また、主人公「俺」にとってアンドレスの作品の持つ意味は、森岡氏が指摘するほど重要であり、意義深いものであったのだろうか。それよりも作家蘇童の关心は、文学青年の主人公「俺」が若さゆえ時に逸脱したり、自己実現できずに現実と理想の狭間に懊惱しつつも日々を生き抜く姿を描き出すところにあるように思える。主人公「俺」は、アンドレスの作品の「井戸を覗く少年」という設定に主人公自身の幼少時の体験を重ねただけであり、ただ剽窃の対象としてでしかアンドレスの作品をとらえていないのではないか。主人公「俺」は、作家となって名を成すために、自分も外国作家を剽窃しようと思い、どうせするならやり方が肝心で、あまり知られていない作家のものを剽窃するのがいいと思っただけではなかったのか。ただ、その目論見も編集者に見破られて潰えてしまうのであるが。

その他、瑣末ではあるが物語の設定の読み落としや引用の不手際と思われる部分も見られたのは残念であった。例えば、蘇童の小説「井中男孩」を論じる第三章での引用部分「今の社会って…でもみんな振りに過ぎないんじゃないの？」では、本来ひとまとまりの会話部分であるのになぜ最後の一文“誰也不敢暴露一点角落性問題”を訳出引用しなかったのだろうか。こここの夏雨と主人公の対話はむしろこの“角落性問題”をめぐって交わされているのではないだろうか。「隅っここの問題（それぞれの個別的であって主要中心的ではない関心事）をさらけ出そうって奴は一人もいない」ことこそがこの作品を読み解こうとする際、登場人物と現実生活とのかかわり方を検討するうえでも大切なポイントとなっていたのではなかったのだろうか。

また、数箇所にわたり森岡氏の見解が示されているものの詳細については「注釈の拙論を参照のこと」で済ませられているところがあった。紙幅の都合もあるだろうがせめてそれら論考の骨子だけでも示すことはできなかったのだろうか。読み手にとって興味深い部分でもあり、本論文の行論の要点となる部分でもあったため余計に残念に思われる。

3月例会（第191回） (2005/3/19)

1) 陳桂棣・春桃『中国農民調査』(2004年1月人民文学出版社)

釜屋 修

発禁と伝えられたが状況は不明。農村における、私たちには理解不能の各種の奇体な税金の過酷な徴収、末端農村幹部の権力濫用、それに抗した正義漢と支持するが意識は低い村人。両者の間に対立が生じ、活動家に対する村のボス側からの殺人を含む凶暴な弾圧——解放前の話かと思わせられる非合理的封建的圧政に省クラス幹部の不誠実極まりない対応が絡む——が行われる。本書はその実態レポートである。

安徽省各村のレポートをいちいち紹介するスペースはないが痛ましい。末端幹部は一族郎党権力にぶら下がり悪逆を極める。中心になる農民は、高中卒業程度の学力を持ち、読書家、中央の文書もよく読み、旺盛な探究心と正義感を持つ。数人が上訪組を作り、県など上級に訴えるが、県、場合によっては省も事なき主義である。(日本の国会の農協議員のような農民の権力、利益を代表する政治勢力も農村ではなく、政治権力も圧倒的に都市偏重である。司法機関も独立性を持った調査活動は行わず、虚偽の報告、杜撰な伝達を行う。農民の司法不信は強烈である。

では問題解決の糸口は誰がつけるのか。ようやく活発になったマスコミである。彼ら自身は解決のための権力は持たないが、中央、地方のテレビの報道、全国的新聞・雑誌に報道することで、中央(党と政府)の関心をひき、中央から省へ事実調査の指示がとび、省や県があわてる。時間はかかるが、ここに「現代化」の成果を確認できる。(とは言え、農民の「暴動」の報道はあまりにも少ない)

それにしても、毎年初めに出される「一号文件」は「三農」問題の深刻さを十二分に物語っている。一言で言えば、新中国の「建設」は農村を犠牲にして都市建設に徹底的ポイントを置いてきた。農民負担の軽減が建国以来の課題であり続ける。農業税、農業特産税、「提留」(公益金、幹部報酬、行政管理費、教員手当、軍属慰労金等上から支給されないものを農民の総収入から留保させる)「集資」(各種建設資金、学校なども作るのは中央の規格に基づくが資金は村で調達)「攤派」(労役割り当て。最近は「以資代労」も多い)、「統籌」(インフラ準備金)は当然、これ以外に、各地により異なるが、言語を絶する「乱收費」「乱罰款」。「道路修築費」はまだしも、「婚前検査費」「豚屠殺費」「夫婦恩愛保証金」「態度費」(?!?)にいたってはいったい何のための税かわからない。税は純収入の5%以内という中央の規定など守られていない。

著者たちは、建国以来の農民負担の歴史経過にも言及する。U字型変遷。本来中国革命は農村による都市包囲であった。農民負担の増大に対し、1952年当時の農村工作責任者寥魯言が61カ村の調査に基づいて毛沢東に提言し、農村幹部を批判した。毛は徹底対策を指示、行政管理費、幹部手当、教員給料の国家財政負担を決定。社会主義の優位性と評価されたという。その後、朝鮮戦争、人口増加、中ソ対立、文化大革命等々と激動が続いて、U字転換となったという。

文革が失敗し、1978年から生産責任制が実施され、人民公社も解体され、農村問題改善の期待がもたれたが、84年党12期三中全会は再び都市改革に最大の重点を置いた。94年には国家税務局と地方税務局との分税も実施された。背景は中央の財政収入減であるが、義務教育、計画育成、烈士・軍人家族福祉費、民兵訓練費などが地方移管、地方は財政難に陥った。その最終しわ寄せは農村末端組織であった。

これは「一国両策」、都市と農村、市民と農民の人為的分割だと著者たちは言う。戸籍制度、労働制度、健康福祉制度、農民はすべて「城外」に締め出され、「三等公民」となった。こうした「城郷二元構造」は「原始的蓄積」（本源的蓄積）だとする理論がある。例会では異論もあったが、本来マルクスが『資本論』第1巻第7編24章で述べたのは16～18世紀におけるイギリスの近代国家つくりの悪辣ぶりとして指摘したのである。社会主義を標榜する限り、中国はこの問題を深刻に受けとめ、解決すべきであろう。中国国内でもこの理論的決着はまだないとのことである。

本書は最後に、今も農民負担軽減に飽くなき努力を続ける人びとの奮闘を紹介している。現政権は2006年からの農業税廃止をもうたっているし、一部の省が実施したとする報道もある。早い解決を切望する。

現実の変貌する農村も自分自身の目で見ている。もちろん「走馬観花」。しかし、本書の深刻さと自分が見たもの間に奇妙な感覚的ズレがあることも最後に付言しておく。

2) 格非「人面桃花」

（『作家雑誌』2004年第六期／単行本 春風文藝出版社 2004年9月）

和田知久

【梗概】

秀米の父、陸侃は長年自室に籠もり、家人には気が触れていると思われていたが、ある日出奔し行方知れずとなつた。主のいない陸家に母の親族という張季元がやってきた。張季元は清朝覆滅を目論む蝴蝶会の同志であった。計画していた梅城攻略計画が未遂のまま失敗すると張季元は普濟を去る。約半月後、近くの河に張季元の死体が漂着した。

張季元の日記は秀米に手渡された。秀米は日記を読了すると衝撃の余り気が触れたようになってしまった。一方、母は秀米の縁談をすすめた。婚礼当日、土匪の襲撃に遭い秀米は輿ごと誘拐された。花家舎につれて来られ、湖上の破屋で中年の尼僧とともに暮らすこととなつた。秀米は囚われの日々を過ごしながら再び張季元の日記を読み始める。張季元が密かに秀米に思いを寄せていたこと、母と張季元との愛情関係、大同の世界への憧憬や革命運動の挫折と気持ちの動搖を日記から知る。やがて策謀により頭目同士は殺し合い、花家舎は壊滅した。残党は革命勢力に組み込まれ、武装蜂起し梅城を攻略するものの失敗に終わった。

秀米たちは日本に逃れていたが、二年後、秀米は子供の小東西を連れて普濟に戻ってきた。秀米は地元のろくでもない人々を集めていろいろと民衆の啓蒙活動を始めたが、どれもうまく行くものではなく、やがて官兵の攻撃を受けた。その際、息子は死んだが、秀米は